▲　昨年当山報恩講、宗秀融先生のお取次ぎの様子（12・16）

慧光

金光寺寺報
第２７０号
発行所　金光寺
宮崎県西臼杵郡
五ヶ瀬町大字鞍岡
５９２７番地
☎　０９８２
８３－２３３８

今月のことば　法語カレンダー

帰ってゆくべき世界は　今遇う光によって知らされる

浅　井　成　海

親鸞聖人は「帰ってゆくべき世界」、すなわち弥陀の浄土について「つつしんで、真実の仏と浄土をうかがいますと、仏は思いはかることのできない光明の如来であり、浄土はまた限りない光明の世界である」と示されています。親鸞聖人にとってさとりの世界は光明、すなわち光の世界だったのです。まさに浄土は光り輝く光明の世界であり、反対に迷いの衆生の世界は闇に包まれた黒闇の世界とされます。それはさとりと迷いの象徴的表現です。

親鸞聖人は『唯信鈔文意』に、「来迎」を「来」と「迎」に分けて、「来」を浄土に往生させるということと、浄土に往生したならば、そのまま浄土に止まるのではなくて、娑婆世界に再び帰ってきて衆生救済をすることであると示されています。それは、往相することは同時に還相することである、という浄土真宗の教えの基本構造である往還の二種回向として示されているということです。また「迎」は、如来が「むかえる」ということであり、それは信心を得るということです。そのような人は正定聚の位についているということであり、そして阿弥陀仏は真実信心の正定聚の人を摂めとって捨てることがない、ということであると明かしているのです。このような金剛不壊の信心のありようを「迎」というのであると示されています。

「帰ってゆく世界」とは、いわば光り輝く清浄の世界であり、そしてそれは単に光り輝く世界としてあるのでなく、再びこの娑婆に帰って、苦悩の衆生を救うというはたらきをする世界であると明かしているのです。

（本願寺出版社刊「大乗」誌掲載
『月々のことば』より抜粋　転載）

仏事お休みのお知らせ

下記の日は緊急を除き仏事はお受けできません。ご協力をお願いします。

◎　１月
　　２５日　（終日）
◎　２月
　　６～７日　（終日）
　　１６日　（終日）
◎　３月
　　４～６日　（終日）

１２月、次の金光寺門信徒の方がご往生なさいました。
謹んでお悔やみ申し上げます。
２０２３年１２月　９日満８８歳
福岡県　杉　本　ノブ子様
２０２３年１２月２４日満８５歳
道の上上　古小路　サダ子様

鞍岡・１２月の天候　（アメダス）
最低気温・－７．９℃（２３日）
最高気温・２０．４℃（１５日）
真冬日日数　１日/３１日
冬日日数　１６日/３１日
月間総雨量・103.0mm（降雨日数・13日）
一日最大雨量・３３．０mm（１９日）

ホームページ開いています。
URL　https://konkouji.jp/
1月4日現在アクセス数　148,678人

金光寺のひと月

十二月

一日　川崎安子様　通夜
二日　田中ツタエ様　三・七日忌
　　霜田スミ子様　一周忌
　　川崎安子様　葬儀・火葬
　　木山マツエ様　三回忌
　　川崎安子様　還骨、初・七日忌
三日　当山前坊守釋妙順　月忌
　　松崎正和様　六・七日忌
　　寺司　寛様　三十三回忌
　　川崎安子様　礼参り
　　川崎栄蔵様　三回忌
四日　秋岡正章様　七回忌
　　津曲アキ子様　三・七日忌
　　荒谷地区報恩講（十軒）
七日　山森徳美様　二・七日忌
八日　田中ツタエ様　四・七日忌
九日　仏具磨き（午前中）
十日　馬見原地区秋参り（二軒）
　　松崎正和様　満中陰、納骨
十一日　津曲アキ子様　四・七日忌
十四日　山森徳美様　三・七日忌
十五日　当山報恩講日中法要（上下参り）
　　当山報恩講逮夜法要（お番）
十六日　当山報恩講日中法要（中央参り）
　　田中ツタエ様　五・七日忌
十七日　高千穂組第八期第六回連続研修会（正念寺）
十八日　当山前住職釋依章　月忌
　　津隈アキ子様　五・七日忌
　　第五回組長会（宮崎教務所）
二十二日　梶本幹夫様　一周忌
二十三日　田中ツタエ様　中陰、納骨
　　渡邊凡子様　一周忌
二十四日　津隈アキ子様　中陰
　　矢野延子様　中陰
　　古小路サダ子様　臨終勤行
二十五日　高千穂組忘年会
二十六日　古小路サダ子様　通夜
二十七日　古小路サダ子様　葬儀、火葬
　　古小路サダ子様　還骨、初・七日忌
二十八日　山森徳美様　五・七日忌
　　古小路サダ子様　礼参り
三十一日　除夜会

住職ひとりごと

（住職　松井卓郎）

大晦日を家族で共に紅白歌合戦を見て過ごした人生の後半、食事をしながら一緒に画面に映る美しい着物を着た女性たちを見ながら、時間が経つのを忘れて教えられたことを思い出しました。

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何をなすかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を為すかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を成すかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を生すかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を聖すかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を正すかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を整すかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を清すかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を浄すかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を静すかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を凝すかを問うべきである」

「人間は、いのちの短さを嘆くのではなく、何を澄